

南湖に放流したホンモロコ標識魚(平成29年度放流群)の追跡調査

米田一紀・根本守仁・大植伸之

1. 目的

かつてホンモロコの主要な産卵場であった南湖は、現在ほとんど産卵が確認されなくなっている。そのため、産卵繁殖場から北湖までの連続性を確保した水草刈り取りおよび種苗放流を行い、南湖での再生産を回復させる取り組みを行っている。水産試験場ではこの事業で放流された種苗を追跡調査することにより、南湖から北湖への移動分布の把握と産卵状況および親魚来遊状況調査によりホンモロコの再生産を確認し、増殖促進効果を実証する。本項では平成29年に下笠地先で放流されたホンモロコ標識魚(以下、下笠放流魚)および赤野井沖耕耘区で放流されたホンモロコ標識魚(以下、赤野井放流魚)の追跡調査について報告する。

2. 方法

① 南湖での稚魚分布状況調査：下笠放流魚(全長20mm、749千尾)および赤野井放流魚(全長20mm、303千尾)の分布を把握するため、流下後から8/20にかけて南湖に設置されたエリ(図1)におけるホンモロコの混獲状況調査(以下、「エリ混獲魚調査」という)を行った。採捕されたホンモロコはALC耳石標識を確認した。
 ② 琵琶湖北湖での標識魚分布調査：北湖への南湖放流魚の移動状況を明らかにするため、北湖での漁獲魚(刺網、沖曳網)の標識調査を行った。

3. 結果

① エリ混獲魚調査では5,903尾の稚魚が採集され、うち1,083尾が下笠放流魚、51尾が赤野井放流魚であった。下笠放流魚の多くは放流地点より北上した地点のエリで採集されたものであったが、調査をした全てのエリにおいて分布が確認された(図1)。
 ② 琵琶湖北湖での標識魚分布調査：秋期(10

～11月)の刺網漁獲魚のうち当歳魚369尾を調査したところ、1尾が下笠放流魚であった。また、冬期(1～2月)の沖曳網漁獲魚のうちホンモロコ当歳魚11,164尾を調査したところ、下笠放流魚は42尾、赤野井放流魚は17尾再捕された。生残率はいずれも4.28%であり、赤野井地区の水田より赤野井湾内へ放流した群(20.20%)と比較すると低いものの(表1)、下笠放流魚については昨年の値(0.91%)を大きく上回り、調査開始以降、最も高い生残率となった。

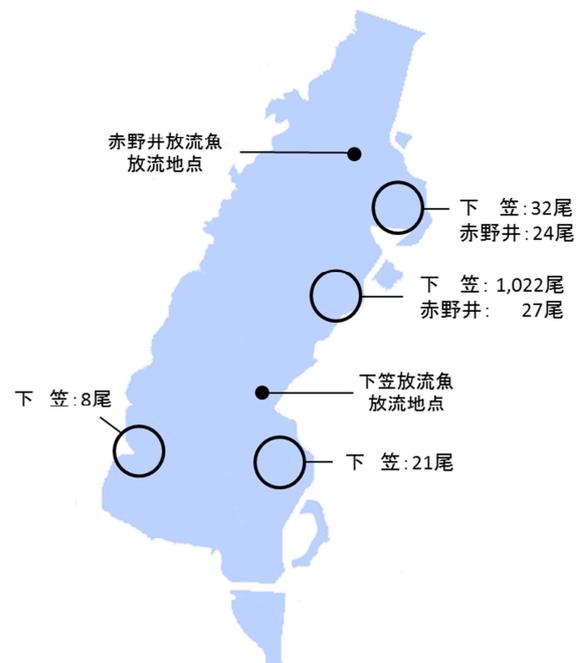


図1 エリ混獲魚調査の調査地点および各地点における放流魚の再捕尾数

表1 冬期沖曳網によるホンモロコ再捕状況

	放流尾数(尾)	補正再捕尾数(尾)	生残率(%)
下笠放流魚	749,000	42	4.28
赤野井放流魚	303,000	17	4.28
赤野井水田より放流	438,500	116	20.20
その他の水田より放流	10,436,000	1,327	9.71